

京都市内の埋蔵文化財発掘調査速報 No.37 (R5-4)

しょくぶつえんきた いせき 植物園北遺跡

調査期間：令和5年10月2日(月)～11月2日(金)

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 はじめに

調査地は北区上賀茂南大路町に所在し(図1)、周知の埋蔵文化財包蔵地である「植物園北遺跡」の北西部に該当します。この辺りは、賀茂別雷神社かものわけいかづちのじんじや(以下、上賀茂神社かみかみじんじや)の社家が明神川沿いに建ち並び、一部区域は、伝統的建造物群保存地区にも指定され(図1のピンク色の範囲)、社家町としての美しい街並みを今も残しています(図2)。

植物園北遺跡は、北西は上賀茂神社付近から、南西は府立植物園の東半、南は北泉通付近、東は松ヶ崎駅と、東西約2km、南北約1.5kmとその範囲はとても広く、弥生時代～古墳時代を中心とする集落跡です。

調査地の周辺では、いくつかの発掘調査が行われています。上賀茂小学校の校内で行われた発掘調査(図1：調査A)では、平安時代の建物や、古墳時代の溝や穴のほか、だてあなたてもの堅穴建物が15棟見つかっており、弥生時代にはすでに多くの人が集落を営み、この地に住んでいたことがわかっています。調査地の東側で行われた発掘調査(図1：調査B)では、弥生時代から古墳時代の堅穴建物や溝のほか、鎌倉時代の井戸や室町時代の溝や堀が見つかりました。この溝や堀は、宅地や集落を区画する施設と考えられます。またこの調査で見つかった室町時代の堀は、社家町を囲んだ「かまえ構」の可能性があり、文明年間(1469-1487)に維持管理を行っていた記録(おきぶみのあん「置文案」(上賀茂神社文書))が残っています。

これらのことから今回の調査では、これまで植物園北遺跡内で多く確認されている弥生時代から古墳時代、平安時代の集落遺跡に関わる遺構や遺物だけではなく、平安時代から江戸時代頃までの上賀茂神社に仕える人々によって形成された社家町に関わる遺構や遺物の発見も期待されるところです。

2 今回の調査について

今回の調査では、室町時代の柱穴や土器を多く含む整地土、江戸時代前半の土坑、江戸時代後半～明治時代の土坑などを見つけました。特に室町時代の整地土は、調査区の東半で確認し(図3・4の赤色の範囲)、江戸時代や明治時代の遺跡で壊されていないければ、調査区全体に広がっていたと考えられます。整地土はにぶい黄褐色の砂質土が用いられており、厚さは30～70cmです。下部構造として拳大～人頭大の河原石が敷き詰められていました。

整地土を除去すると、北西から南東方向の浅い谷状の自然地形が確認できました。しかし谷状地形の範囲には、本来あるべき当時の表土は確認できませんでした。おそらく、この谷部分はほかよりも水が流れやすく、地盤が弱かったと考えられます。整地の際に、やわらかい表土を剥ぎ、しっかりと地盤を出してから、水が多少入り込んでも地盤が緩まないように石を埋めた後、土を盛り、平らな地面を作り出したのではないかと考えられます。

3 まとめ

今回の調査では、当初想定していた弥生時代から古墳時代の集落跡に関わる遺跡は確認できませんでした。しかし室町時代の遺物に混じって、弥生土器や古墳時代の須恵器や土師器などの土器片が確認できることから、この付近にも、弥生時代から古墳時代の人々が生活していたことがわかります。

今回の大規模な整地の発見は、室町時代の社家町の形成過程を考えるうえで、貴重な成果になると考えられます。(奥井智子)

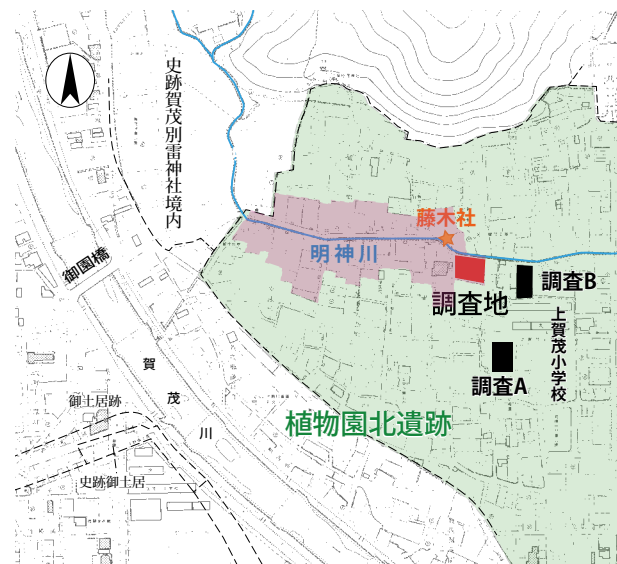


図1 調査地位置図(1/10,000)

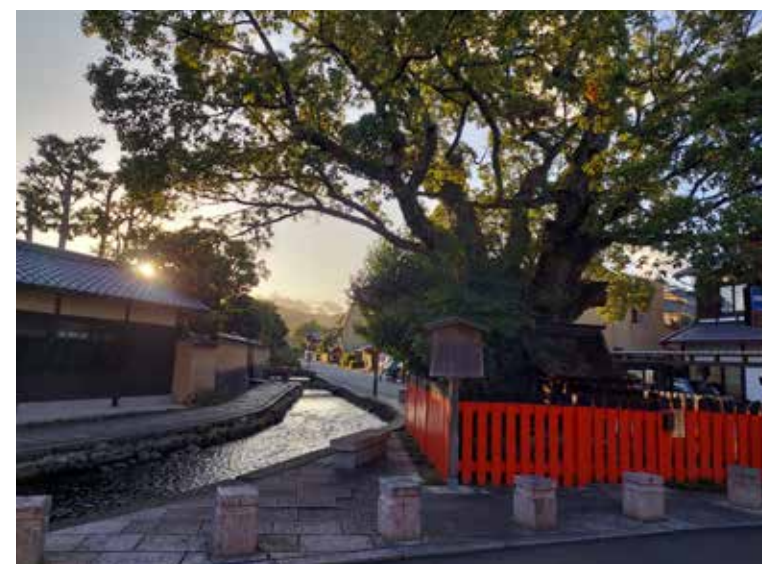


図2 藤木社と現在の社家町(東から)



図3 第1面完掘状況(東から)



図5 整地土下部構造の石敷き内土器出土状況(北東から)



図4 第1面整地土下部構造の石敷き検出状況(西から)



図6 整地土下部構造の石敷き内土器出土状況(北東から)